第十九章　日英露佛四國同盟案

露佛ヨリ同盟締結ノ提議

露國ハ獨墺ト開戰後モ極東軍ヲ其儘ニシテ置イタ、是レハ日本カラ背後ヲ衝カレルノヲ恐レタ爲デ、曩ニ書イタ船越代理大使ノ談話ニ依ツテモ明カナ樣ニ、獨逸ハ此種ノ不安ヲ募ラセル宣傳ヲ盛ニシタ模樣デアル佛國モ亦其印度支那所領ノ安危ニ關シ大ナル危惧ヲ懷テ居タカラ、露佛兩國ガ、我國トノ親交ヲ更ニ强固ニスル爲策動シタノハ當然デアル。

露國外務大臣「サゾーノフ」氏ハ八月十日本野大使ニ大要左ノ如キ談話ヲシタトノコトダ。

露國政府ハ豫テカラ日英同盟ニ加入シタイ希望ヲ持ツテ居タノデ、今回ノ事變ガ勃發スル約二週間前ニ、自分ハ駐英露國大使ニ訓令シ此希望ニ對スル英國政府ノ意嚮ヲ探ラシメタラ、「グレイ」外相ハ大イニ歡迎シ此思付ハ頗ル余ノ氣ニ入ツタ、ト述ヘラレタトノコトダ、然ルニ其後時局ノ推移ノ爲、本問題ハ其儘ト成ツテ居ルガ、極東平和ノ爲ト日露兩國永遠ノ利益ノ爲ニ、此際是非共本件ヲ纏メタイ考ヘデ露帝ニモ上奏シ嘉納ヲ得タ、今更言フ迄モナク日本ガ英露佛三國ト協同シテ今回ノ戰爭ニ加入セムコトハ露國ノ切ニ

希望スル所デアル。

然シ斯クノ如キ重要案件ハ右カラ左ニ運ベルモノデハ無イカラ、差シ當リ露國ニ疑懼ノ念ヲ一掃サセ、安ンシテ獨墺トノ戰ヒニ全力ヲ注キ得ル樣仕向ケルノガ急務ダト考ヘタ加藤外相ハ、八月十五日露國大使ニ我對獨通牒ヲ內報スル機會ニ日本政府ノ名デ、露國ガ其極東軍ヲ歐洲方面ニ移送シテモ、後顧ノ憂ハ決シテ無イトノ保障ヲ與ヘタ。

大戰ノ初期同盟談ヲ頗ル熱心ニ我國ニ持掛ケタノハ露國ヨリモ却ツテ佛國デアツタ、是レハ佛國ガ同時ニ露國ノ代辯モ勤メテ居ルノダト見ルノガ、至當ダロウガ佛國大使ガ加藤外相ニ同盟談ノ口ヲ切ツタノハ八月四日デ、此時ハ佛國大使モ左迄進ンタ話ヲセズ、加藤外相トシテモ突然ノコトナノデ極メテ漠然ナ應對ヲシタニ過キナカツタ、然ルニ八月七日ノ午後四時ニ初マツタ第二回目ノ會談ハ六時三十分迄二時間半モ續イテ佛國大使ハ本國政府ノ名デ提議ヲシタノダカラ、我方ニ取ツテモ愼重ノ考慮ニ値スル案件タルニ至ツタ。

之ニ對スル加藤外相ノ意見ト筆者

加藤外相ト佛國大使ト會談ノ時ハ通譯ノ爲、筆者ガ常ニ列席シテ居タカラ、記憶ノ儘會談ノ要點ヲ左ニ書イテ見ヨウ。

大使、過日會談ノ後其要領ヲ本國政府ニ打電シタラ、政府ハ直チニ返電シテ之レヲ嘉納シ、交涉ヲ進捗スル樣命スルト同時ニ、此趣旨ハ戰爭ノ勃發前佛國大統領ガ露都訪問ノ際、本野大使ト談話ノ折互ニ交換

シタ意見トモ合致スルコトヲ附加ヘテ來タ、自分ノ上申ハ外交上ノ慣例ニ從ヒ英露駐劄ノ佛國大使ニモ直チニ内報サレタコトト信スルガ、佛國政府ガ自分ノ電稟ニ對シテ直チテ返電ヲ吳レタノハ、此交渉ノ速カニ成就スルノヲ望ンテ居ル證據デアル、自分ハ本件ニ關シ過日閣下ニ申入レヲ爲スニ先立チ、在京ノ露英兩大使ニ内談シタラ、露國大使ハ直チニ贊成シ、英國大使ハ當時其國ガ未タ戰爭ニ加ハツテ居ナカツタ爲、自分ノ意見ヲ好意的ニ迎ヘテハ吳レタガ保留的態度ヲ執ツテ居タ。自分ノ提案ハ必スシモ日本ガ直チニ戰爭ニ加ハルノヲ希望スル次第デハナイノデ、現ニ存在スル日英同盟協約ニ佛國ガ加盟スルコトニ日本ガ同意ダカドウカヲ知ラント欲スルニ過キヌ、夫レ故日本ハ之レガ爲ニ現在以上ニ何等ノ義務ヲ負ハサルニ反シ、佛國ハ之レニ依リテ其軍備充實ノ爲ニ巨額ノ資金ヲ投シタ露國ノ軍隊ヲ悉ク歐洲ニ移送サセルコトガ出來、又露國ガ現在ノ日英同盟協約其モノカ或ハ更ニ詳細ノ規定ヲ加ヘテ之レニ加盟スルニ於テハ、極東ニ於ケル日本ノ地位ハ現在ノ日露協約ニ依ルヨリモ他ノ二國ガ同盟國タル關係上更ニ安固ヲ加フルニ至ルダロウ、自分ハ日本ニ赴任當時カラ此事ヲ考ヘテ居タガ、日尚ホ淺イノニ從來ノ外交政策ヲ變更セムトスルノ提議ヲ本國政府ニ爲スハ如何アラムカト思ヒ差控ヘテ居タガ、過日ノ會談ノ要領ヲ電報シ直チニ之レラ是認サレタノヲ見テ欣喜措ク能ハヌ所デアル、若シ日本ガ此提議ニ贊同サレルナラ單ニ日本ノ地位ヲ安固ニスル許リデナク、今カラ云フノハ或ハ時機デナイカモ知レヌガ、山東ハ日本ノ自由ニ委ネラレルダロウ、

外相、佛國ガ日英同盟協約ニ加盟スルノヲ希望スル理由ハ奈邊ニ在ルノダロウカ。

大使、之レニ依ツテ佛領印度支那ノ保全ヲ安固ニショウトスルノニ外ナラヌ、現ニ日佛協約ハアルガ此協約ハ未タ充分ノ保障ヲ與ヘテ居ルモノトハ謂ヒ難イ。

外相、ソノ儀ナラハ日本ハ過去ニ於ケルト同樣將來ニ於テモ佛國ト友好ノ關係ヲ持續シテ渝ルコトハ無イカラ、不幸ニシテ歐洲ノ交戰ガ長引キ萬一交戰國ノ疲弊ヲ見ル樣ナコトガアツテモ、日本ガ佛國ノ極東領ヲ侵害スルコトノ無イノハ玆ニ言明スルヲ憚ラヌ。今回ノ提議ハ青島ニ關シテハ餘リ考量ヲ加ヘテ無イモノト思ハレル、青島ノ獨逸兵力ハ至極微弱故其存立ハ歐洲ノ戰局ニハ影響ガアルマイ。

大使、獨逸ガ東亞ノ地圖カラ抹消サレルノハ佛國ノ最モ希望スル所デアル。

此會談ノ際加藤外相ハ後日ノ誤解ヲ避ケル爲メ、佛國ノ提議ヲ文書デ出シテ吳レヌカト申入レタラ、佛國大使ハ多少躊躇ノ後私信デナラハト答ヘタノデ、外相之レヲ諾シ、此私信ハ八月九日ニ屆イタ。

其要領ハ左ノ通リテアル。

佛國ハ日本ト更ニ密接ナル關係ヲ結ハムコトヲ希望シ、一九一一年日英兩國間ニ締結サレタル同盟協約ノ規定ニ加盟セムト欲ス。

佛國ハ之レニ依リテ其極東領並ニ其權利ノ尊重ヲ更ニ確實ニ擔保シ得ルコトト思考ス。

現時獨國ニ對シテ爲シツツアル戰爭ニ於テ、佛英露聯合三國ハ各々其兵力ノ全部ヲ使用シ得ルコトニ關シ最モ大ナル利害ヲ感スルモノナリ、現時ノ狀況ノ下ニ締結サレタル佛日同盟條約ハ、一切ノ危險ガ極東ヨリ除去セラレ且ツ其利益ハ極東ニ於テ迫害セラレストノ保障ヲ露國ニ與フベシト考察セラル、露國ハ之レ

ニ依リテ西比利亞ニ駐屯スル重要ナル兵力ヲ使用シ、獨逸ニ對スル戰爭ニ之レヲ參加セシムルヲ得ベシ。

人民ノ權利ヲ憂念シ條約ヲ敬重スル協商三國ハ、各國民ノ負擔スル軍備ノ重荷ヲ輕減セムガ爲メニ平和ヲ保持セムトスル眞摯ナル意思ヲ有シ、最近ノ事件ニ依リテ明カニ之レヲ表白シタリ。

佛國兩國間ノ同盟條約ハ有効ニ且ツ特ニ有意義ニ、三國軍ノ成効ト其共同政見トニ貢獻スベシ。

斯クノ如クシテ三國協商側ニ加盟スルニ於テハ、日本ハ現時ノ狀況ノ下ニ其利益並ニ其將來ノ爲メニ非常ニ重要ナルベキ一新地歩ヲ作ルニ至ルベシ、一九〇七年ノ日佛協約ガ日露間ノ一般及特別協定ノ締結ヲ誘導セシコトニ想到セハ、佛國トノ新條約ガ露國ト更ニ密接ナル關係ヲ生ゼシメ得ベキコトヲ意識スルモ敢テ疎妄ニ非ザルニ似タリ、

非常ニ希望スベキ此結果ニシテ若シ實現セラルルニ於テハ、極東ノ平和ヲ確立スベキ一種ノ相互的保障ハ日本ト泰西大國トノ間ニ成立シタル關係ニ加ヘラルベシ。

佛國トノ條約ハ日本並ニ佛國ニ於ケル輿論ノ希望ニ呼應スルガ如ク思考セラル。危險ノ際ニ締結サレタル此條約ハ兩國人民ニ依リテ貴重ナル同情ヲ以テ迎ヘラルベク、此同情ハ不動ノ基礎ノ上ニ兩國人民ノ友好關係ヲ樹立スベシ。

露國ガ經濟的發展ノ進捗ニ付其同盟以來佛國ヨリ享受シ、依ツテ以テ今日ノ盛ヲ致セル貴重ナル財政上ノ援助ハ、爾後日本亦佛國ニ於テ之レヲ享受スルニ何等異議アル所ナカルベシ。

佛英露三國ハ獨逸ガ其野望ノ根據ニ供シ、且ツ三國ノ共同利益並ニ世界ノ平和ノ爲メニ陰謀ト脅害的企業

トノ源地ヲ構成スル領地ヲ支那ニ於テ保有シ能ハサルコトニ關シ、同一ノ利害ヲ有ス。

若シ日本ガ英國ト合意ノ上青島ノ占領ヲ爲スニ決シタル場合ニハ、佛國ハ好意ヲ以テ之レヲ迎フベシ。

以上ノ考案ガ佛國政府ニ於ケルガ如ク亦日本國政府ニ於テ嘉納セラルルニ於テハ、速カニ之レヲ明確ニスルハ最モ必要ノコトナルベク、以下記載スル條約案ハ前掲ノ見解ニ應スルモノト思考セラル、本案ハ其主義ニ關シ日本國政府ノ回答アルヤ否ヤ巴里ニ之レヲ轉達シ佛國政府ノ承認ヲ經ベシ。

案

佛國ト日本國トノ間ニ存在スル友好關係ヲ鞏固ナラシメムコトヲ希望シ、且ツ一九〇七年ノ條約ニ規定サレタル主義ニ遵由シ、佛蘭西共和國政府及日本國皇帝陛下ノ政府ハ、一九一一年七月十三日日英兩國間ニ締結サレタル同盟條約ヲ、佛日兩國協定ノ基礎トナシ、之レニ依リテ兩國間ノ互約ヲ擴張セムト決シ、左記諸條約ヲ採納スルニ一致スルト同時ニ、如何ナル場合ニ於テモ左記諸條ハ、英國又ハ露國ニ反抗スルガ爲メニ、兩締約國ノ一方又ハ他方ニ依リテ援用セラレ能ハサルモノタルコトヲ特記ス。

第一條　一九〇七年六月十日ノ佛日協約並ニ兩國間ニ締結セラレタル一切ノ條約及協定ハ明カニ維持セラルベシ。

第二條　以下（一九一一年日英協約第一條乃至第六條ノ飜譯文）

超エテ八月十二日更ニ二時間餘ノ會見ガ加藤外相ト佛國大使トノ間ニ行ハレタ、其模樣左ノ如シ。

外相、御申越ノ要領ハ大隈首相ニ傳ヘテ置イタガ、何分ニモ目下多忙ノ爲メ本件ヲ熟考スル暇ガ無ク、未タ自分ノ意見ヲ定メルコトガ出來ヌノデ、從ツテ閣僚ト凝議スル運ヒニ至ツテ居ラヌガ、豫メ承知シテ置キタイノハ御送附ノ條約案ニハ第二條以下日英協約第一條乃至第六條ノ挿入ト記載アルモ、之レヲ適用スル場合ニ關シ日英協約前文ノ樣ナ規定ノ無イノハ、何カ特ニ理由ノアル次第ナリヤ。

大使、日英協約前文ノ意ハ悉ク日佛協約中ニ記載サレ、ソシテ提案第一條ニ日佛協約ノ維持ヲ宣言シ、又提案ヲ前文ニ日英協約ヲ基礎トスル旨ノ聲明ガアルカラ、日英協約ノ前文ヲ繰返ス必要ガ無イト思フテ記載シナカツタ迄デヾ、其意ハ全ク日英協約ノ前文ニ掲ケラレタ目的ノ爲メニ日佛同盟ヲ結フ趣旨ナノダカラ、誤解ヲ避ケル爲メニ閣下ノ御意見通リ日英協約ノ前文ヲモ轉記スルガ或ハ善イカモ知レヌ。

外相、日本ガ戰爭ニ參加スルヤ否ヤノ問題ト、日佛同盟ノ締結トハ全然別種獨立ノ二案件ダト考エルガ如何。

大使、無論兩者關聯スルコトナシ、若シ日本ガ參戰スル場合ニハ、一日モ早ク日佛同盟ノ締結サレンコトヲ希望ス、佛國民ハ御了知ノ通リ熱狂的性質ヲ持ツテ居ルカラ、此同盟ガ戰局ノ初メニ結ハレルト否トハ、佛國民ニ與ヘル反響ニ多大ノ差異ヲ生スベク、從ツテ日本ガ同盟ニ依リテ得ムトスル効果ニモ頗ル影響ガアルコトト思フ。

外相、至極御尤ノ意見ナリ、成ルベク速カニ考量スルコトト致スベシ　日英協約第三條ノ規定ニ依レハ前文ニ記述セル目的ヲ害セサル約定ヲ日本ガ第三國ト締結スルニ當リ英國ト協議スル必要ハ無イガ、日本

ガ佛國ノ提議ヲ承諾スルニ決シタト假定センニ、此場合本件ニ關シ英國ト協議スルノハ協約全體ノ趣旨ダト考フ、ソシテ佛國モ亦或ハ英國ノ意嚮ヲ聞クコトガアルカトモ思ハレカラ、日本政府ガ如何ニ速カニ其決定ヲシテモ、英國ガ目下ノ戰局ノ爲メ多忙デ本件ヲ考量スル暇ガナケレハ、其締結ハ自然遲レル道理ダ。同盟ヲ結フコトニ關シ自分一個ノ意見サヘ未タ定マラヌ今日、斯クノ如キコトヲ述ヘルノハ甚タ早計ニ失スルガ、念ノ爲メニ附加ヘル。

大使、以前ナラハ日英協約ニ第三國ガ加盟スルコトハ或ハ英國ニ不快ノ念ヲ惹起サセタカモ知レヌガ、今ハ佛國ト英國トハ共同利益ノ爲メニ獨逸ト交戰シツツアル際デアルカラ、直チニ快諾ヲ與フルコトト信スル。「グリーン」大使ハ至極留保的ノ人ダガ、自分ガ此提議ニ關シテ談話シタ時ニ得タ感想ニ依レハ、「グ」氏ハ明カニ贊成シテ居ルト認メルコトガ出來タ、日本ガ英國ト協議スルノハ勿論ノ事デ、佛國モ斯クノ如キ重大ナ條約ヲ結フニ當リ最モ利害ノ關係多キ英國ト必ス相談スルコトト思フ。

外相、先刻本野大使カラ「サゾーノフ」外相ニ面會シタラ、駐日露國大使カラ本件ニ關スル電報ニ接シタトノ話ガ在ツタトノ入電ガアツタ。

大使、之レハ多分第一回會談ノ事ダラウ、九日送附ノ覺書ハ未タ露英兩大使ニ内示シテ居ラヌ、之レハ内示シタ爲メ其寫ヲ請求サレ、日本政府ノ回答モナイ内ニ、條約案ノ内容ニ種々意見ヲ出サレル樣ナコトノアルノヲ虞レタ爲メダ、露國ガ矢張日本ト同盟ヲ結ヒ度イ意嚮ヲ持ツテ居ルノハ明カデ、其間ノ橋渡シヲスルモノヲ求メツツアル樣ニ思ハレルカラ、若シ日佛同盟協約ノ締結ハ明治四十年ノ時ノ樣ニ此使

命ヲ果スコトガ出來レハ頗ル幸セダ。

加藤外相ハ日佛又ハ日露同盟ニ餘リ乘氣セヌ樣ニ見エタ、內閣ノ空氣モ此樣ニ種々ノ國ト協定シテハ同盟ガ無意味ニ成リ一種ノ協商化スルト云フ意見ニ共鳴シテ居ル如ク見受ケラレタ。然シ外交系統ヲ同シクシテ居ル國々ノ間ニ結ハレル同盟ハ、假令其國數ガ多ク成ツテモ少シノ矛盾モ撞着モ起ラヌ、殊ニ我國カラ見タ日英同盟ノ目標ハ明治四十年ノ日佛協約ト同年及四十三年ノ日露協約デ露佛兩國ニ關スル限リ既ニ其實在性ヲ失ヒ、獨逸ハ今ヤ極東カラ驅逐サレントシテ居ルノダカラ、殘ルノハ只米一國ノミデアルガ、英國ハ最初カラ米國ヲ敵ニ廻ハス氣ハ無イノダシ、明治四十四年ニ結ハレタ第二回目ノ日英同盟協約ハ明カニ之レヲ裏書キシタノダカラ、我ガ國飽迄日英同盟ノミニ膠着シテ居ルノハ決シテ策ノ得タモノデ無イ。之レハ筆者ガ當時懷抱シテ居タ信念デ、加フルニ講和ノ際ノ我要求サヘ未タ何ノ保障モ取付ケテ居ラヌノダカラ、此際露佛ト同盟シテ我將來ノ地歩ヲ確保スベキダト數回大臣ヤ小池政務局長ニ進言シタ。小池氏モ筆者ト同感ダツタノデ大臣ニ縷々陳述シタ結果、大臣ノ氣モ多少動イタト見エ、佛國政府ノ意嚮ヲ探ル樣石井大使ニ電訓シタ之レハ八月十二日ノ事ダガ、何ニシロ大臣ニ餘リ乘氣ガ無イノダカラ其電報ノ文句中ニモ同盟締結ヲ歎迎セヌ腹中ヲ反影サセル節ガアツタノハ殘念ダガ、石井大使カラ十五日ニ屆イタ返電ヲ見ルト佛國政府ノ意嚮ヲ報告シタ終リニ、何ノ理由モ述ヘスニ只日佛同盟ハ此際結フニ及フマイト附記シテ在ツタ。加藤大臣ハ心窃カニ會心ノ笑ヲ漏ラシタラウガ、吾々ニハ甚ダ殘念デ殊ニ理由ガ書イテ無イカラ石井大使ノ胸中ヲ忖度スルノニ往々誤解ガ在ツタノヲ頗ル遺憾トスル。

佛國デハ八月二十九日內閣ガ改造サレテ各黨派ヲ網羅スル國防內閣ガ出來「デルカツセー」氏ガ外務大臣ト成ツタガ、佛國大使ハ九月二十六日加藤外相ニ向ツテ同盟ニ關スル外相ノ意見ヲ「デ」氏ニ報告シタイト云ヒ、重ネテ同盟ノ締結ヲ熱心ニ慫慂シタガ、加藤外相ハ未タ考量中ノ旨ヲ答ヘルト同時ニ、日英佛露ノ四國ハ協同シテ獨逸ト戰爭シテ居ル現狀ダカラ、同盟問題ハ戰爭ノ終結ヲ待ツテ決メテモ遲クアルマイト告ケタ

「グレー」英外相ノ見解

露國カラ同盟締結ノ提議ノ在ツタ後我國ハ參戰シタ、日本ハ今露國ト共同ノ敵ニ對シテ戰ヒツツアルカラ若シ露國提議ノ眞意カ我參戰ヲ目的トシテ居ルノテアツタラ、最早同盟談ハ立消エル譯タト考エタ加藤外相ハ、九月十五日本野大使ノ觀測ヲ聞キ合ハシタラ、同大使カラ諸般ノ事情カラ觀察スルノニ、露國テハ日本ノ參戰後モ未タ日英同盟ニ加入ヲ希望シテ居ルモノト信セラレルトノ返電カアツタ。加藤外相ハ本野大使ニ電訓シタト同日ニ井上大使ニ宛テテ左ノ趣旨ノ電報ヲ發シタ。

我國ト同盟ヲ締結セントスル露國ノ希望ハ、日本ノ參戰ニ依ツテ最早目的ヲ達シタノテハ無イカト推察サレルノミナラス、日英同盟ハ共同ノ敵ヲ目標トシタモノテアルノニ、今該同盟ヲ擴張シテ列强ノ多數ヲ網羅スレハ、目標ノナイ同盟ト成ルヘク、又日英同盟ノ効力ヲ薄弱ナラシメル虞レカアル樣ニモ思ハレ、最モ熟考ヲ要スル所、「グレイ」外相ハ曾テ在英露大使ノ申入レニ對シテ贊意ヲ示シタトノコトタ、就テハ以上ニ關シ英國外務大臣ノ腹藏ナキ意見ヲ聽取ノ上報告サレタイ。

筆者ニハ此電報ノ出タ當時日英同盟カ持ツテ居ル目標ナルモノヲ見出スコトハ出來ナカツタ、前ニモ書イタ樣ニ假令總括的仲裁判條約ハ不成立ニ終ツテモ、英國ハ米國ニ對シテ我ト協同スル氣遣ハ絶對ニ無イノタカラ、我國ニ取リ最早何等ノ目標モ亦實用性モ無イ日英同盟ヲ、此以上ニ目標ヲ無クナストカ効力ヲ薄クスルトカ云フコトハ少シモ意味ヲナサヌ、否ナ此同盟ニ我ト外交系統ヲ一ニスル他國ヲ加エレハ、玆ニ始メテ目標モ生マレ又効力モ復活シ得ル可能性カアルノテ、筆者ニハドウシテモ加藤外相ノ意中ヲ了解スルコトカ出來ナカツタカ、ソハ兎モ角トシテ九月十七日「グレイ」外相ト會見シタ井上大使カラ左ノ趣旨ノ「グ」外相談ヲ報告シテ來タ。

今回ノ戰爭破裂前約二箇月、露國政府カ亞細亞ニ關スル英露同盟締結ノ希望ヲ持ツテ居ルコトヲ駐露英國大使カラ報告シテ來タカ、餘リ漠然ナ話ナノテ格別留意セスニ打過キテ居タラ、其後獨露開戰當時駐英露國大使來省シ、露國カ日英同盟ニ加入ノ希望ヲ有スル旨ヲ告ケ、右ハ歐洲戰爭勃發ニ鑑ミ、又極東將來ノ平和ノ爲メニモ露國ノ切望スル所タトテ、自分ノ意見ヲ叩イタカラ、自分ハ主義上同大使ノ提言ニ歡迎ノ意ヲ表スルト同時ニ、日本カ戰爭ニ加ハルヘキヤ否ヤ不明ノ此際本件ノ考量ハ未タ其時機テ無イタラウト述ヘ、程能ク應答シテ置イタカ、日獨開戰後間モ無ク露國大使ハ本國政府ノ訓令ニ依リ重ネテ本件ヲ提議シ、且ツ出來得ヘクハ亞細亞全體ニ關スル日英露同盟ト爲ス方機宜ニ適スル旨ヲ附言シタカラ、自分ハ日本カ既ニ獨逸ニ對シ開戰シタ今日、日英露三國ハ協同シテ同一ノ敵ニ當ツテ居ルノテ、事實同盟關係ニ在ルコト故、此際特ニ本件ノ議ヲ進捗スル必要ハアルマト。蓋シ露國ノ考カ政治上ノ目的ニ出ツル同盟締結

談トシテナラハ、交戰進行中ノ今ハ之レカ商議ノ時機ニ非サルヘク、寧ロ平和克後戰爭ノ結果トシテ徐ロニ相談スル方カ可然タト思考スル旨答ヘテ置イタ。右樣ノ次第テ我方ヨリ進ンテ何等本件ヲ促進スルカ如キ態度ニ出タコトハナイカ、若シ日本政府カ此際本件ニ付露國トノ間ニ商議ヲ進メ樣トノ考ナレハ、英國ニ於テモ日本ト共ニ右商議ヲ開クニ異存ナク、自分ハ今日迄露國側ニ對シテハ何等日本ノ迷惑トナル如キ言辭ヲ用ヰタコトハナイ、今後モ本件ニ付テハ成ルヘク日本政府ノ希望ニ副フヘキ措置ヲ執ルニ躊躇セヌ露國カ同盟締結ノ提議ヲ爲スニ至ツタ眞意ニ關シテハ、同國ノ頗ル熱心ナ態度ニ鑑ミ、不純ノ意圖カアルトハ思ハレヌ、自分トシテ露國ノ誠意ヲ疑フヘキ何等ノ理由モ無イ。

九月二十八日加藤外相ハ今少シク具體的ニ「グレイ」外相ノ意見ヲ聽ク樣井上大使ニ電訓シタ、三十日「グ」外相カ井上大使ノ問ニ答ヘタ要旨ハ左ノ通リテアル。

露國ノ申出ニ付テハ自分ハ曩ニ露國大使ニ答ヘタ趣意以上ニ、差向キ未タ具體的ニ考量ヲ費シタコトカナク、又佛國カラ日本政府ニ申出タトノコトハ今始メテ貴大使ヨリ承知スル所テ、英國政府ニハ今日迄何等類似ノ申出ハナイ、ソハ兎モ角本件同盟ハ寧ロ一種ノ「アンタント」トナリテ日英同盟本來ノ性質ヲ變更シ其効力ヲ薄弱ナラシメル憂アリトノ加藤男ノ所見ハ、自分モ諒トスル所タ。自分ノ立場トシテハ戰爭進行中此種ノ問題ヲ處理スルノハ好マシクナイ、宜シク戰後適當ノ時機ニ讓リタイ希望タカラ今後露國側カラ本件ニ關スル談話ノアツタ時ニハ、豫メ日本外務大臣ト協議ヲ盡シタ上テナクテハ曩ニ露國大使ニ應答シタ以上ニ何等ノ開示モスルコトカ出來ヌト答ヘ置ク積リタカラ、加藤男ニ於テモ類似ノ場合之レト同樣ノ應

對ニ出テラレテハ如何、一面自分モ本問題ヲ篤ト研究シテ置コウ。

大正五年ノ日露協約ノ意義

何ニセヨ此同盟問題ハ我國ニ取リ非常ニ重大ナ案件タカラ、加藤外相ハ在外使臣ノ意見ヲ徵シタラ、在露本野大使カラハ即時締結贊成、在英井上大使カラハ戰後締結贊成ノ返事カ在リ、在佛石井大使ノ回答ハ贊否明瞭ヲ缺イテ居タ樣ニ記憶スル。ソシテ對米關係ニ言及シタノハ井上大使ノ電報丈ケタツタト思フカ、政治上ノ同盟ハ戰後ニ讓ル方カ至當タトノ「グレイ」外相ノ意見ハ、偶々加藤外相ノ夫レト附合シテ居タ。然シ筆者ノ考テハ未タ戰局將來ノ見据ヘサヘ付カヌ今日、戰後ノ國際配合ヲ豫想スル事ハ頗ル難事タカラ、同盟談ヲ戰後ニシタイトノ主張ハ、寧ロ一時逃レノ口實タト思ハレテモ致方カ無イ。之レニ反シテ協商三國側ニ立ツタ我國ハ飽迄此三國ト協同シテ善處スヘキテ、今ニ於テ露佛ト同盟セハ自ラ戰後ノ國際配合ヲモ指導スルコトトナリ、又獨逸カ沒落スレハ英國ニ取ツテモ日英同盟ノ必要ハ無クナルノタカラ、ソシテ日本トシテ最早用ノ無イ同盟ナノタカラ、假令我方ヨリ廢棄セヌ迄モ、英國カラ此氣分ノ見エタ時ニ間誤ツカヌ用意ヲシテ置ク必要カアル、ノミナラス其頃英國ハ我海軍ノ占領シタ獨領南洋諸島ノ配屬ニ付テモ甚タ不愉快ナ態度ヲ執ツテ居タノタカラ、旁々速カニ四國同盟ヲ結ンテ以上ノ諸點ヲ解決スヘキタト思ツタ。以上ハ十月二日ノ筆者ノ日誌ニ書イテアツタ要領其儘ヲ轉記シタノタカ、當時露國カ今ノ樣ニ成ロウト想像シテ居ナカツタノハ勿論テアル。然シ若シ戰爭中ニ四國同盟ヲ結ンタトシテモ、相手國ノ情勢其他カ同盟國トシテ我ニ有害

無益ノ狀況ト成ツタラ、飽迄其同盟ヲ續ケル必要ノ無イコトハ言フ迄モナイコトテ、此樣ナ事ハ條約ノ有効期間ニ關スル規定ノ書キ方テ容易ニ解決シ得ラレル問題テアル。其後大正五年七月ニ日露協約ハ結ハレタ。時ノ外務大臣石井子爵ノ近著「外交餘錄」中ニ、此條約ハ專ラ露國カ獨逸ト單獨講和スルノヲ妨ケル目的テ作ツタモノタト述ヘテアルカ、露國テハ多分之レト正反對ノ見地カラ協約ヲ歡迎シタラウ、ソシテ筆者ハ此協約ノ出來タ時前ニ書タ樣ナ他ノ意味テ大イニ之レヲ祝慶シタ、然ルニ翌年三月露國ニ第一革命起リ十一月ニハ勞農制施カレテ、當時ノ期待カ水泡ニ歸シタノハ如何ニモ殘念至極テアル。